

創立期のサラマンカ大学

— 王権と大学 —

林 邦 夫*

(1989年10月16日 受理)

La Universidad de Salamanca en la época fundacional

: El poder real y la Universidad

Kunio HAYASHI

はじめに

スペイン最古の大学¹⁾は1200年頃に設立されたパレンシア大学であるが、これは13世紀中頃に消滅した。現存のスペインの諸大学の中で最も長い歴史を有するのはサラマンカ大学である。本稿は創立期（創立からアルフォンソ10世治世末年まで）のサラマンカ大学と王権との関係を中心にして考察を加え、これを通して創立期のサラマンカ大学の基本的性格を解明しようとするものである²⁾。固よりサラマンカ大学は中世スペインの唯一の大学ではないが、これを取上げ考察することで、大学という新たな制度が、スペイン中世国家において果たした役割が多少なりとも明らかになるものと考えらる。

I サラマンカ大学の創立年代

まずサラマンカ大学がいつ設立されたのかという問題を検討しよう。これについては確たる定説はなく、次のような諸説に分かれている。

- (1) 1200年説 R. Gibert³⁾, J. Lalinde Abadía⁴⁾
- (2) 1215年説 A. García-Gallo⁵⁾, A. Jiménez⁶⁾
- (3) 1218・19年説 J. González⁷⁾, V. Beltrán de Heredia⁸⁾, J. Fernández Conde⁹⁾, J. M. Pérez-Prendes¹⁰⁾, L. de Echeverría¹¹⁾, A. Rodríguez Cruz¹²⁾
- (4) 1227年説 H. Rashdall [の改訂者]¹³⁾

設立年代の考証材料となる史料は次の通りである。

* 鹿児島大学教育学部社会科

史料1 サラマンカ大学の回廊にある碑銘文 (16世紀末)¹⁴⁾

「主の年の1200年、カスティーリャ王アルフォンソ8世、パレンシア大学を創立せり。レオン王アルフォンソ9世、これに倣いて、同じくサラマンカのアカデミアを創立せり」。

史料2 カスティーリャ王フェルナンド3世の証書 (1243年4月16日付)¹⁵⁾

「余の父〔アルフォンソ9世〕が彼の地〔サラマンカ〕に^{エスグレラ}大学を設立せしその時代に」。

史料3 Tuy司教 (1239-49) Lucas de Tuyの*Chronicon Mundi* (1236年のやや後に執筆)¹⁶⁾

「レオン王アルフォンソは、その息〔カスティーリャ王〕フェルナンド3世と和議を結んだとき、彼より援助を受けて、王国内の反乱者を征圧した。そして大規模な軍勢を集め、サラセン人に対して戦端を開き、カセレス周辺の一切のもの、即ち、樹木、ブドウ畑、耕地を戦火をもって破壊し、帰還した。

ここに有益な助言により、聖書に精通した教師たちを招聘し、サラマンカの^{スコラ}大学を創立することを決めた……。

ポルトガル王がレオン王国を攻撃したので、アルフォンソ王は San Esteban de Cavia という自らの城を攻囲し、これを奪還した。しかしポルトガル王と和平を結び……」

史料4 フランシスコ会修道士 Gil de Zamora の *Liber illustrium personarum* (1282年以降執筆)¹⁷⁾

「王アルフォンソと王妃ベレンゲーラは、上記の子供たちを儲けたが、血縁関係の故に教皇インノケンティウス3世により離婚させられた。その後、王の間での戦争と劫掠が暫時、熄んだ。王が近隣のすべての王から脅やかされたときは常に主が彼を扶け給うた。神がより一層扶け給うようと、王は自らの収入でストゥディウム・ゲネラーレをサラマンカに創立した。……ポルトガル王が自らを攻撃したとき、アルフォンソ王は San Esteban de Cavia と呼ばれる自らの城を攻囲し、力でもって征服した」。

以上の史料によって(1)～(4)の諸説を検討してみよう。

史料1からは、サラマンカ大学が1200年に創設されたとは必ずしも取れないが、(1)の論者は恐らく史料1を根拠としているものと推定される。仮にこれが1200年創設を示していると解釈出来るとしても、作成年代が16世紀末とかなり後のものであること、大学自身の作成したものであり、伝統を誇るために殊更、創設年代を古くした可能性も考えられ、信頼性に乏しいと言える。

史料2はアルフォンソ9世 (在位1188-1230年) がサラマンカ大学を設立したことを明確に述べている。古い年代の、しかも国王の息子の証書であり、信憑性に疑問の余地はない。

(2)説の創始者と思われる La Fuente はとくに根拠を示していない。Rashdall の改訂者は、La Fuente は1200～30年の丁度間をとって1215年頃にしたと推測している¹⁸⁾ が、何れにせよ大雑把な推量であり、今日の段階では、最早受入れ難い。

史料3は年代的に最も古いので信頼性が高く、設立前の状況に触れているので設立年代を特定す

るのに有益な史料である。アルフォンソ 9 世は、1219年の復活祭までを期限とする休戦条約を1217年11月に息子のカスティーリャ王フェルナンド 3 世（在位1217-52年）と結び、1218年 8 月26日には講和条約が結ばれ、これによってイスラムとの戦いが続行可能となった。このときアルフォンソ 9 世はカセレス攻囲を試みるが、降雨にたたられて撤退を余儀なくされた。史料 3 はこのカセレスからの帰国後に大学を創立したとしている。そしてその後には、ポルトガル王のレオン王国攻撃とポルトガル王とアルフォンソ 9 世との和約が記されているが、この和約は1219年 6 月に締結されたから、設立年代は1218年 8 月26日～1219年 6 月の間に収まることになる¹⁹⁾。

史料 4 は設立前の出来事として、王妃ベレンゲーラとの離婚（1204年）、和平（1218年 8 月26日）、を挙げ、設立後の事件としてポルトガルとの戦争を記しており、史料 3 とほぼ同じ内容であるが、設立前の記述は史料 3 の方が詳しく、史料 4 は更めてこれを確認しているという点で意味があると言えよう。

結局、史料 3・4、とりわけ前者から、1218・19年が最も妥当な設立年代と結論出来る。

ところで Rashdall は唯一人、1230年の少し前としている。彼は史料 3 を引用しており、何故かかる立場をとったのかそれのみでは定かでないが、改訂者は、カセレス攻撃は1218、1222年になされたが、占領は1227年のことだ、と註記している²⁰⁾。つまり、彼らは史料 3 の記述を1227年のカセレス征服のこととしているのである。しかし、原文はカセレスの周囲を劫掠したとあるのみで、占領したとは記していないし、また上述のように1219年のポルトガルとの戦争・和平がその直後になされているのだから、1218年の攻囲の記事と見做すのが妥当で、Rashdall 及びその改訂者の見解は否定さるべきである。

次に何故、サラマンカが大学設立地として選ばれたのかを考えてみよう。

Beltrán de Heredia はこれについて、第 1 にレコンキスタの進展につれて、サラマンカが王国の中心に位置するようになるという地理的位置の優位性、第 2 に城塞と広い属域を具えている主要都市であること、第 3 に健康な大気と豊かな物産の地であることを挙げている²¹⁾。

当時のレオン王国の領域を見ると、サラマンカは決して中心とは言えず、南に偏した位置にある。しかし将来の南方への王国の拡大を考慮すれば、やがて王国の中心となるべき位置にあると言える。第 2 の理由については『第一総合年代記』から引用がなされている。「サラマンカ市は、多くの住民と大きく広い属域をもつ点で、レオン王国の他の都市を凌駕している」²²⁾。かかる記述を直ちに受入れ、サラマンカを当時のレオン王国の最大の都市とするのにはなお検討を要するが、主要な都市の一つであったことは確かであろう。第 3 の理由について、サラマンカがかかる風土であったことは、1255年 4 月 6 日付の教皇アレクサンデル 4 世の大勅書に「汝〔アルフォンソ 10 世〕は、極めて豊沃といわれるサラマンカ市、レオン王国の中で健康的な大気をもち、誰にでも快適であるが故に選ばれたこの場所に、……ストゥディウム・ゲネラーレを創設した」²³⁾ とあるのを根拠としている。この部分は大勅書の発給を求めるアルフォンソ 10 世の嘆願書に記されているのをそのまま繰返したものと推測される。アルフォンソ 10 世の祖父にあたる同名の 9 世が、孫と同じ配慮からサラマ

ンカを選んだとは断言は出来ないものの、アルフォンソ10世の後出の『七部法典』は、「大学は、教師と学生が健康に生活出来、勉学の疲れを癒せるような良い大気と美しい郊外をもち、パンとブドウ酒が豊富で、生活費が安い町に設立さるべきである」²⁴⁾と大学の立地条件を規定しており、かかる条件は一般性をもつものと見做し得るから、あり得ることであると思われる。

以上のようにサラマンカが大学設立地に相応しい条件を具えていたとしても、これのみでサラマンカに大学が設立されたのではない。サラマンカ大学は、何らの母胎もなしに生まれたのではなく、サラマンカ司教学校とサンティヤーゴ・デ・コンポステーラ司教学校をその前身としている。サンティヤーゴは大司教座が置かれ、サンティヤーゴ巡礼の聖地であり、司教学校の伝統もサラマンカよりも古い。これらの点を考えると、レオン王国の最初の大学はむしろサンティヤーゴに創設されるのが適当ではなかったのか、という疑問が生ずる。この疑問に答えるのが上記の三つの理由である、と我々は考える。第2・3の理由に関しては、サンティヤーゴがサラマンカに比して著しく劣っているのかどうか、我々は明確に答えるだけの知見をもち合わせていないが、左程大きな逕庭があったとは思えない。重要なのは第1の理由ではなかろうか。王国の各地から、教師・学生が到来することが予想される王国の最初の大学の設立地としてサンティヤーゴは余りにも偏った位置にあることは否定出来ず、しかも王国の南方への拡大につれて、偏よりは増大していく訳で、このために司教学校としてはサンティヤーゴよりも歴史の浅いサラマンカが選ばれたのであろう。実はこの他にもサラマンカが選ばれた重要な理由があるが、これについては後述する²⁵⁾。

次にここで挙げたサラマンカ大学の二つの制度的起源について見ていこう。

II サラマンカ大学の起源

〔1〕 サンティヤーゴ司教学校

サンティヤーゴ教会の再編を企てた司教 Cresconio が召集した1063年の教会会議の決議は、司教座聖堂に学校を設置することを命じている。これが司教学校の存在に関する公式の最初の知見であるが、後にレオン司教となった Don Pelayo (在位1065-1085年) が、11世紀30年代頃にサンティヤーゴで学んでいるので、これ以前に何らかの学校が存在していたことが考えられる²⁶⁾。1095年には学校の存在が初めて確認され、校舎が設けられて文法・修辞学・詩学・弁証法が教えられていたことが知られる²⁷⁾。サンティヤーゴ大司教 Diego Gelmírez (1100-20年司教, 1120-40年大司教) は、聖職者たちをフランスに留学生として派遣し、またトスカナ人 Raniero, フランス人 Hugo, Gilaldo などの外国人学者を招聘し、学問の振興に寄与した。1168年には留学する聖職者に留学中の収入を保証する優遇策がとられ、これ以後、フランスやイタリアへの留学生が増加した²⁸⁾。サンティヤーゴにおける学問の隆盛には大司教の奨励策の他に、巡礼地としての性格も影響したと考えられる。多くの人物の移動する巡礼路を介して、外国の学者や文物が流入するという条件が学問興隆に好都合なものであったことは言う迄もない。

着目すべきは、学校の栄えたサンティアゴの地の聖職者の中に国王尚書局 (cancillería real) に入り、尚書 (canciller)、書記 (notario)、祐筆 (scriptor) などとして国王の側近くに仕えた人物がいたことである²⁹⁾。

カスティーリャ＝レオン王アルフォンソ 7 世 (在位1126－57年) の治世には、助祭長で後にサラマンカ司教 (1135－50)、サンティアゴ大司教 (1140－43) となった Berenguer が書記・尚書として、聖堂参事会員で教師 (magister) の Petrus Gonzalbez が尚書として、聖堂参事会員 Johannes Fernandiz が祐筆・書記として仕えている。レオン王フェルナンド 2 世 (在位1157－88年) の治世には、助祭長の Fernando Curialis, Mondoñedo 司教 (1153－67?) でサンティアゴ大司教代理 (1162－63)、同大司教 (1168－73) を歴任した Pedro Gudesteiz, サンティアゴ出身で外国で学び、サラマンカ司教 (1166－73)、サンティアゴ大司教 (1173－1206) となった Pedro Suárez de Deza, 助祭長 Pelayo Lauro (o de Lor) の 4 人が尚書となっている。なお、重要な事実として、1158年 9 月30日付の証書³⁰⁾において、フェルナンド 2 世はサンティアゴ大司教 Martín Martínez とその後継者に対して王室礼拝堂付司祭と尚書局長官の職位を許与しており、これによってサンティアゴ教会と国王尚書局とのつながりが、制度的・永続的なものとなった。

最後にアルフォンソ 9 世 (在位1188－1230年) の治世を1218・19年以前について見ると、助祭長 Pedro Vela が先王の時代から引続き尚書を務め、その他に聖堂参事会員の Fernando と Juan Arias, 同じく聖堂参事会員でサラマンカ教会の助祭長となった Pedro Pérez が尚書として登場する。書記では聖堂参事会員 Fruela, 祐筆も務め後に尚書となった Pedro Pérez がいる。

ところで前出の Lucas de Tuy の記述には、アルフォンソ 9 世は「有益な助言により」大学を設立したとある。サンティアゴが学問的伝統をもつ土地であったことを考えると、かかる助言を与えたのは、国王側近として仕えていたこれらの聖職者であったのではなかろうか。それでは具体的には一体誰が進言したのであろうか³¹⁾。

アルフォンソ 9 世がかなり以前から大学設立を進言されていて、1218・19年に急に決断したというよりは、進言を受けてから短期間に決意したと考えるのが、前出の Lucas de Tuy の記述からしてより妥当であろうと思われる。だとすれば、1218年当時に側近であった者が助言者であったと考えられる。この当時の尚書は Pedro Pérez であり、書記・祐筆は Miguel Rodríguez であった。Pedro Pérez は遅くとも1204年11月には書記として尚書局にいたことが判明するが、それ以来、尚書 Fernando が1210年に退職するまで唯一の書記として現われ、その間自らが書記として署名している文書の大半を祐筆として作成している。その後 2 年半は彼の名は尚書局文書には現われないが、それ以前の1208年 6 月～1209年 4 月にサンティアゴ聖堂参事会員となっている。1213年 7 月～11 月に副尚書 (vicecanciller) として再び現われ、同年12月には尚書となり、1230年のアルフォンソ 9 世の死に至るまでその職に在った。その間、少なくとも1214年 5 月19日以来サラマンカ教会助祭長を務めている。1224年からはサンティアゴ聖堂参事会員、Orense の司教学校学監として現われ、竟にはサラマンカ司教となった (1243－64)。

Miguel Rodríguez は、1214年5月以来、Pedro Pérez の下で書記として働いているが、彼が教師の地位をもっていたことは注目される。

以上、両者の経歴・地位を考慮すると、サラマンカ助祭長や後に同地の司教を務め、サラマンカに地縁があり、長きに亘り、尚書局に在勤して国王の側近として仕え、恐らくはその信任が篤かったものと想像される Pedro Pérez が、下僚であり、教師の肩書をもつ Miguel Rodríguez と合議の上で、国王にサラマンカでの大学設立を進言したのではないかと推察される。

しかし、Pérez が唯一人の判断でかかる進言を行なったとは考えにくく、その背後には彼を支える人脈が存在したと思われる。そこで彼の人脈を探てみると、興味深い事実が明らかとなる。González によれば、彼はサラマンカ司教 Gonzalo Fernández (1195-1226) の甥であり、また Gonzalo の兄弟には前出の Fruela、それにサラマンカ助祭長で後に書記として尚書局に入る Martín がいた。そして Fruela は前出のサンディヤゴ大司教 Suárez de Deza と親戚であった。このように Pedro Pérez の周囲に目をやるとサンティヤゴやサラマンカの教会に根を張る聖職者 (= 国王官僚) の一族の姿が浮かび上ってくるのである。その多くがサラマンカの教会に聖職を得ていることを考えると、この一族の故地は恐らくサラマンカであったのではなかろうか。Pedro Pérez はかかるサラマンカの一族の意向をうけて、サラマンカでの大学設立を国王に働きかけたのではあるまいか。

〔2〕 サラマンカ司教学校

『わがシッドの歌』(*Poema de Mio Cid*) の中で「学問に良く通じ、いとも思慮深い」³²⁾と謳われた再征服後最初の司教 Jerónimo (1102-20) が既に学校を設立したと Beltrán は推測しているが、学校の存在を窺わせる最初の事実は、前出の Berenguer をサラマンカ司教に選出した Carrión の教会会議にサラマンカの学頭 (archischola) が列席していることである。より直接に学校の存在を示す事実は、1170年6月1日に教皇に承認された聖堂参事会規則の中で、定められた日に聖務を怠った者には衣服手当を支給しないことを定めている条項で、病床にあるか、「若しくは学校にある」(vel in scholis fuerint) のでないならという条件がつけられている条項である³³⁾。この他に教師の肩書をもつ人物が1150年を初出として聖堂参事会員の中に出てくることも根拠として挙げられよう。

Martín Martín に拠って³⁴⁾、教師 (magister) や学監 (magister scholarum) の肩書を伴って登場する人物を挙げていくと、まず前出の司教 Berenguer が1183年の国王証書の中で「尚書たる教師 Berenguer (magistri Berengarii cancellarii)」と呼ばれている³⁵⁾。以下、文書の日付と名前のみを列挙していくと、1150年教師 Pelayo (Pelagio)³⁶⁾、1174年学監 Pedro³⁷⁾、1176-78年教師 Pedro (Petrus)、教師 Randulfo (Randulfus)³⁸⁾、1180年教師 Arnaldo、教師 Pedro³⁹⁾、1191年学監 Pedro Abat (Petro Abat)⁴⁰⁾、1196年教師 Bernaldo (Bernaldus Calvo)⁴¹⁾となる。これ以外の者で教師として González の挙げている人物を列挙すると、Ostensio (Ostem) (1163-64)、Juan Barrao (1163-73)、Cristóbal Vela (1163-73)、Jordán (1182-85)、Juan (1181)、Ricardo

(1173-94), Fruela (1213-) である⁴²⁾ (括弧内は教師と確認出来る年代)。

これらの教師の中で特徴的なのは外国人の多いことである。Juan Barrao はポルトガル人, Ricardo と Randulfo はイギリス人の兄弟, その他 Ostensio, Arnaldo, Jordán も外国人であるという。外国人の到来とは逆に, サラマンカの聖職者の外国留学の例も確認出来る。1163年頃の或る遺言状⁴³⁾ には, ブドウ畑を処分して得た金を, フランスに派遣される4人の聖職者に送るよう定められている。サラマンカ司教学校も, サンティヤーゴと同様に, 外国人教師の到来や留学生の派遣による外国からの学問摂取によって栄えていたものと推測される。

ところで, サラマンカ大学創立との関連では, 教師の中に Fruela が含まれていることが大いに注目される。Fruela はサンティヤーゴの聖堂参事会員として出発し, 1187年から1204年まで書記として国王尚書局に務め, その後は恐らく勉学に精励したものと想像され, 1213年にはサラマンカ司教学校の学監として現われている⁴⁴⁾。かかる事実を踏まえて, 更めて大学設立を企てた主体を考えてみると, まずサラマンカ司教で国王から「親愛なるわが養子」(dilecto alumpno meo) と呼びかけられる程⁴⁵⁾, 信任を勝ち得ていた Gonzalo Fernández, その兄弟で尚書局書記を経てサラマンカ司教学校学監となった Fruela, Fruela の後任として, 恐らくはその縁故から尚書局入りし, 書記から尚書となった両者の甥の Pedro Pérez, 血縁で結ばれ, 夫々, サラマンカの教会, 司教学校それに宮廷(尚書局)に関わっていたこのトリオこそ, González の推論のように, 大学設立の発起人であったと考えられる。

III 王権とサラマンカ大学

アルフォンソ9世によって設立されたサラマンカ大学は, その後のフェルナンド3世(在位カスティーリャ王1217-52年, レオン王1230-1252年), アルフォンソ10世(在位1252-84年)の両王によって如何に遇されたのであろうか。大学に関する両王の証書を素材としてこの問題を検討してみたい。まず原本や写本の現存する8点の証書の内容を見ていこう。

〔1〕 フェルナンド3世

(1) 1243年4月6日付⁴⁶⁾ ①サラマンカに学校が置かれることを許し, 命ずる。②大学に到来する教師・学生及び彼らの使用人と, 彼らが持ち来たるすべてのものを余の保護下に置く。③余の父が大学を創設した時代に, 住宅やその他の事柄に関して学生が得た慣習や特権を更めて承認する。④学生は, 平和に真面目に生活し, 町の人々に邪で不埒な行為をしないこと。学生同志や学生と町の人々との間の争いから生ずることは, 本証書で余の任命する人々(サラマンカ司教, 聖堂参事会長, ドミニコ会修道院長など)が監察し, 匡正すること。

(2) 1252年3月12日付⁴⁷⁾ ①サラマンカの学生は, 自分や使用人のために搬入・搬出するものについて通行税(portazgo)を免除される。②学生は王国内をその所持品ともども安全に往来することが出来, 如何なる者も学生が禁制品を搬出するのでない限り, それを没収したり, 学生を捕え

たりしてはならない。

〔2〕 アルフォンソ10世

(3) 1252年11月3日付⁴⁸⁾ サラマンカ市参事会に対して次のことを命ずる。①大学の教師・学生の権利を守り、彼らが如何なところからも暴行・不正をうけることに同意しないこと。②彼らが余の父フェルナンド王と祖父から得た特権を守ること。

(4) 1252年11月10日付⁴⁹⁾ サラマンカ市参事会に対して次のことを命ずる。余の父は大学の学生に特権を与えたが、市参事会がこれを守っていないこと、また市参事会が争闘する学生を援助し、武器を与え、このため勉学が妨げられていること、以上のことを学生が申立ててきた。余はかかる事態を憂慮し、①汝らが余の父が命じたすべての事柄に関して学生の特権を守り、②争闘する学生に武器や援助を与えぬこと、を命じる。

(5) 1254年5月8日付⁵⁰⁾ ①学生は他の学生が既に賃借している住宅を賃借してはならない。護学官 (conservador) は、住宅の家賃を査定し、その場合、査定額は17マラベディ (maravedis) 以下にすること。②学生は司教の破門判決を守ること。③学生はサラマンカ司教の命令や承認を得ないで大学の共通印章をもたぬこと。④パンやブドウ酒やその他のものを販売するためにサラマンカに搬入する者は、没収されたり、妨げられたりしないこと。⑤町のアルカルデは大学の特権を守ること。⑥司教や学監 (maestro escuela) は、争闘者となり勉学を妨げている学生を捕え、投獄するか追放すべし。⑦町の平民 (legos) が学生に危害を加えた場合は、町のアルカルデが彼らを処罰すること。⑧大学に次の人員を置くこと (括弧内は年収)。市民法学教師 (maestro en leys) 1人 (500mrs.)、助手として得業士の聖堂参事会員が付く。教令集教師 (m. en decretos) 1人 (300mrs.)、教皇令集教師 (m. en decretales) 2人 (500mrs.)、論理学教師 1人 (200mrs.)、文法教師 2人 (200mrs.)、医学教師 2人 (200mrs.)、司書 (estacionario) 1人 (100mrs.)⁵¹⁾、対位法教師 (m. en organo) 1人 (50mrs.)、薬剤師 (apocario) 1人 (50mrs.)、護学官 2人 (200mrs. 内 1人は聖堂参事会長で、大学経費として200mrs. が与えられる)。以上の総額2,500mrs.は護学官が受領し、上記のように使用すること。⑨学生は争いを起こさず、余との協定を守ること。

(6) 1267年8月14日付⁵²⁾ Astorga, Villafranca など7都市参事会に対して、サラマンカ大学の学生が大学の管理や住宅の維持のために持って来るものから通行税を徴収せぬよう命ずる。これを守らぬ都市があるとの苦情があるので、確実に守るよう命令する。

(7) 1271年1月31日付⁵³⁾ サラマンカ市参事会などへの命令。大学の教師・学生からの陳情によれば、生活必需品が大いに不足しているとのことであり、パン・ブドウ酒その他の食料を搬入し、販売する者から没収したり、妨害したりしないこと。サラマンカで不足が続いている間、これを守るよう命ずる。

(8) 1276年1月1日付⁵⁴⁾ サラマンカ大学護学官に対して、教師と学生の苦情をうけて、余が彼らに与えた特権を守り、守らせるよう命令する。

次にこれらに簡単な註釈を加えておく。

(1) ①は父王アルフォンソ9世によって設立された大学の存在を後継者として更めて公認したものの。②は到来する教師・学生の身柄と所有物の保護。③は住宅などに関する先王の与えた特権（具体的内容は不明。後の(5)①と同様のものか）の確認である。④学生が一般市民と喧嘩沙汰を起こすことが多かったことは想像に難くないが、これを戒めてトラブルが生じた場合には特定の人々が対処するよう定めたものである。教会関係者の他に肩書のない5人の名前が列挙されているが、これは都市側の代表であると思われる。人数の多さや特定の人名が示されていることからみて、制度が固まる以前の暫定的性格の組織であると言えよう。

(2) ①は学生への通行税免除特権の付与、②は同じく王国内自由安全通行権の授与である。

(3)・(4) 固有の法規・裁判権と経済的特権をもつ大学の設立は、都市の中にその支配に完全に服する訳ではない新たな団体・制度が出現することを意味しており、「不可避的な社会的摩擦をもたらす」⁵⁵⁾ことになる。都市当局は出来る限り大学をその統制下に置こうとするから、大学側はこれに対抗して王権に権利の確認と都市当局に対する遵守命令を求めることになる。その結果が(3)・(4)の国王証書なのである。(3)①は教師・学生の権利の尊重と身柄の安全に配慮するよう命じ、②は既存の大学特権の尊重を命じている。(4)①は(3)②と同様な命令であるが、②は直ちにはその意味が理解出来ない。Beltrán de Herediaはこの命令の背後には、地元の学生と他郷の学生との間に争いがあり、市参事会が地元学生に加担している事態があるとしている⁵⁶⁾。この当時のサラマンカ大学に同郷人団(nación)があったという確証はないようだが、学生が出身地別に纏まるのは自然の傾向としてあったと思われるから、首肯すべき見解と思われる。

(5)は多岐に亘る内容を含んだ重要な証書である。①は学生が既に他の学生の入居している住宅の家主により高い家賃を申出ることによってその学生を退去させ、その後に入居することを禁じたものと解されている⁵⁷⁾。サラマンカ大学の最初の学寮は漸く1386年に開設されているので、それまでは学生は旅籠や下宿などを住宅としたと思われる。他所からの新規の居住者の増加に充分、町が対応出来なかったり、或いは大学により近い有利な住宅を得る競争もあつたりで、学生の住宅確保は厳しい事情にあつたものと想像される。かかる事情がこの条項の背景にあつたと考えられる。学生のかかる行為は、結果的に家賃高騰を招くことになり、彼らの生活を圧迫する。これを禁じたこの条項は家賃高騰を抑えるための学生保護を目的としていたと言えよう。その後の家賃最高限度額の設定も勿論、同趣旨のものである。ところでここに出てくる護学官は、本来聖職者であるためにその権限が教会的事項に限られる学監の意をうけて世俗的事項に関する学監の措置を実施する任務を帯びた人々で⁵⁸⁾、③から明らかなように財政も担当しており、結局、大学の行政実務者であると考えられる。④は司教権力を認めようとしぬ学生が存在を窺わせる。⑤後出のように1255年7月15日の教皇大勅書で共通印章が認められるが、この時点ではまだそれをもつことが禁じられていた。共通印章は大学が法人格として認められた証しであると考えられるから、この時点ではまだ大学の法的自立は実現しておらず、サラマンカ教会当局の監督下にあつたと言えよう。⑥は販売のための搬入とあるから、学生の食料搬入に関するものではなく一般的な性格の規定であろう。かかる規定

が何故この証書に含まれるのか疑問が生ずる。食料供給は都市当局の重要な任務の一つであり、様々な規制が加えられていたものと思われるが、この規制のために教師・学生への食料調達が困難となる事態が、例えば不作期などに生じたのではなかろうか。前述のように都市当局は一般に大学と対立関係にあったとすれば、規制から最も不利益を被りやすいのが大学ではなかったかと推測される。こう考えると食料搬入・販売の規制を廃したこの規定の主旨が大学保護であったことが理解されるのである。⑤は(3)⑥, (4)④で市参事会に命じたことをアルカルデにも命じたもの。⑥既に(1)④, (4)⑥にも学生の争闘が出てくるが、ここでは投獄や追放といった厳しい処分が規定されている。(1)④の規定の後、この時点で明確に司教と学監に学生に対する裁判権が帰属させられたことになる。ところで学監は司教学校の長であったが、大学においては学位の授与やこの規定から窺える大学関係の裁判を権能として有していた職位である⁵⁹⁾。⑧は⑥と関連して市民が学生の加害者となった場合には、アルカルデが処罰することを、逆言すれば学監の裁判権が及ばないことを定めたものである。⑨は当時のサラマンカ大学の構成を知る上で重要な素材である。この内容については後にも触れるが、ここでは音楽(対位法)教師のいることが注目されることを指摘しておきたい。Rashdallによれば、サラマンカ大学は音楽の教育や学位授与を行なった最初の大学だろうとされる⁶⁰⁾。音楽の重視はこの証書の授与者アルフォンソ10世の個人的性格によるものではないか、と思われる。王は吟遊詩人(trovador)を自称し、有名な『聖母マリア古謡集』(*Cántigas de Santa María*)を集成し、ルネサンス期のスペインの独創的音楽理論家 F. Salinasによれば「彼が優れていたその他の数学的学問〔四科〕に劣らず音楽においても抜きん出ていた」のであり⁶¹⁾、かかる王の資質が大学に音楽教師を置くという特色の源泉であったと考えられる。⑩は最後に学生に対して一般的戒告を加えたもの。

(6)は(2)④の内容を七つの都市に徹底させることを目的としたもの、(7)は(5)④を繰返したものである。

(8)は護学官に対して、その中心的職務の励行を命じたものである。

以上の証書で着目しておきたいのは、第1に更めて繰返し指摘するまでもなく、王権とくにアルフォンソ10世が大学に対して手厚い保護・特権を与えていること、そしてとくに都市当局にその尊重を命じていることである。第2は、(5)⑨から大学の研究・教育における法学、就中市民法学の重視が窺えることである。教師の人数を見ると、法学関係5人(市民法学1人、同助手1人、カノン法学3人〔教令集2+教皇令集1〕)、文法2人、医学2人、音楽1人であり、法学の比重の大きいことが判る。人数のみから言えば、市民法学は1.5人(助手を半分とみて)でありカノン法などに及ばないが、重要なのはむしろその地位であろう。これは給与から推量してよいと思われるが、1人当りの給与は、音楽50mrs., 文法、医学各100mrs., 教皇令集250mrs., 教令集300mrs., に対して、市民法学は500mrs. と断然多く、その重視が確認される。つまりサラマンカ大学は、神学中心のパリ大学型ではなく、法学中心のボローニャ大学型に属すると言えよう。

IV 教皇とサラマンカ大学

次に一般に中世の大学と深い係わり合いをもった教皇が、サラマンカ大学をどう遇したのか、という点をみていきたい。本稿の対象時期では、アレクサンデル4世（在位1254-61年）の発給した7点の大勅書があり、これを素材とするが、まず内容を知るために夫々の一部を訳出しておく。

(1) 1255年4月6日付 「汝は、極めて豊沃といわれるサラマンカ市、レオン王国の中で健康的な大気をもち、誰にでも快適であるが故に選ばれたこの場所に、余の尊き同胞たる司教、並びにサラマンカ司教座聖堂参事会の愛すべき子らの助言と同意を得て、ストゥディウム・ゲネラーレを創設した。そしてこのストゥディウム・ゲネラーレが教師らによって将来に亘って屢々訪ずれるように、使徒の保護によって強化されることを、へり下って余に要請した。それ故、余は汝の懇願に心を向けて前述の司教と聖堂参事会の同意を得て汝により為されたことが有効であり、好ましいことであることを、使徒の権威をもって承認し、本書状の庇護をもって強化するものである。」⁶²⁾

(2) 1255年7月15日付 「共通の印章を有し、自由に使用出来るようにという汝らの請願をうけて、汝らの献身に対して、確固たる権威をもって自由なる権限を譲与する」⁶³⁾。

(3) 1255年7月15日付 「汝らの嘆願を受入れ、如何なる教皇使節や副教皇使節、教皇裁判使節や保護裁判使節も教皇の権威や使節自身の権限をもってしても、大学に対して破門、聖職停止、聖務禁止の判決を、これの承認に言及した教皇座の特別の命令なしに公布することは出来ないことを確固たる権威をもって承認する。」⁶⁴⁾

(4) 1255年9月22日付 「何人も、教師・学生・学頭・学生代表の大学に対して、教皇座の特別の許可なくして、破門、聖職停止、聖務禁止の判決を公布することが出来ないことを承認する」⁶⁵⁾。

(5) 1255年9月22日付 「サラマンカ市において多くの教師や学生が聖職者に対する暴力行使の廉で破門され退去することが屢々起こっている。……余は彼らの研究が不在によって妨げられることを望まぬし、またそれは不都合なことである。汝に確固たる権威をもって次のことを承認する。互いに或いは他の聖職者に対して暴行を加えた教師や学生に、もし暴行が教皇座において正しく裁かれる程に重大で過度なものでないならば、教会の規則に則って、予め定められた誓約の義務の下に、不正を適切に償い、同様な事柄に関してこれ以上度を過さぬよう彼らに命令し、赦免の特典を与えるべし」⁶⁶⁾。

(6) 1255年9月22日付 「教師や学生の或る者が、サラマンカのストゥディウムで如何なる学科においてであれ、先行する正当な試験によって講義するに適格であると判明した場合は、それ以後、パリとボローニャのストゥディウム・ゲネラーレを除く、如何なるストゥディウム・ゲネラーレにおいても、一度その試験を受けたのと同じ学科において更なる試験なしに、また何らの反対も受けずに講義し得ることを、汝らと汝らの後継者に対して承認するものである」⁶⁷⁾。

(7) 1255年10月19日付 「汝は王国の高位聖職者の助言をうけて、汝の王国のサラマンカ市にストゥディウムを創設し、各々の学科を講義する教師に一定の給与を毎年支給した。このストゥディ

ウムが望ましい発展を遂げるように、そこで学ぶことを望むすべての者（律修聖職者は除く）に、同市において市民法を今後3年間、それを禁じた規則に妨げられることなくして、聴講し得ることを確固たる権威をもって許す」⁶⁸⁾。

次に、これらに簡単に註釈を加えておこう。

(1) は教皇がサラマンカ大学を恐らく初めて公式に承認したものであり、これによって大学は聖俗両権の承認を得たことになり、その地位が充分に確立したと言えよう。(2)は(1)に付随した事柄で、大学に独立の法人格を教皇権が許与したことを意味する。(3)・(4)は大学に対する教会の課罰を制限したものであり、(3)で教皇使節に向けられていたのが(4)では全聖職者を対象としており、大幅に拡大されている。換言すれば、両大勅書は大学への教会罰の適用を厳しく教皇のみに限定したものであり、それによって教会権力からの大学の相対的独立を確保したものと見えよう。(5)は聖職者への暴行で処罰された学生への赦免付与権を学生に対する裁判権を有する学監に許与したものの。(3)・(4)が将来に対する規定であるのに対して、(5)は既に処罰されている学生を赦免することを規定したものであり、同様な性格をもつと言えよう。(6)は制限付の万国教授資格 (*ius ubique docendi*) を付与したもので、大学の格を高めることになったと思われる。サラマンカ大学は1240年のリヨン公会議において、パリ、ボローニャ、オックスフォードとならんでキリスト教世界の四つの明星の一つと呼ばれており⁶⁹⁾、既に声名が高かったが、この措置でそれが制度的に保障されたことになる。(7)は神学研究が疎かにならぬように市民法の修学が禁じられていた聖職者に対して、在俗聖職者に限ってはあつたが、それを認めたものである。3年と期限を限っているが、一旦始まった学問の流れが途切れるとは考えにくいから、事実上、期限を越えても許されたものと想像される。我々はこの許与が、既に見たサラマンカ大学における市民法学の重視の現われの一つであると考え、留意しておきたい。

さて、上記の試訳では「汝(ら)」という代名詞をそのまま訳しており、このままでは大勅書が誰の請願で、誰に宛てられたか不明である。そこで訳出した以外の部分からこれを補うことによっ

〈表〉大勅書の請願者と名宛人

大勅書	請 願 者	名 宛 人
(1)	カスティーリャ＝レオン王	同 左
(2)	教師・学頭・学生のuniversitatisの愛すべき子ら	同 左
(3)	教師・学頭・学生のuniversitatis	同 左
(4)	?	教師・学生のuniversitatis
(5)	?	学 監
(6)	カスティーリャ＝レオン王及び教師・学生のuniversitatisの愛すべき子ら	教師・学生のuniversitatisの愛すべき子ら
(7)	カスティーリャ＝レオン王	同 左

〔出所〕 *Bulario*, docs. 10-16.

て、夫々を具体的に示すと〈表〉のようになる。

ここで目を惹くのは、(2)において学頭が現われてくることである。前出の国王証書には学頭という言葉は全く現われてこない。(2)はサラマンカ大学の学頭が存在することを示す最初の文書である。後出の『七部法典』には学頭（スペイン語では *mayoral*）を扱った箇条があり、それによれば学頭は学生の中から選ばれ、争闘する学生に懲罰を加えることを任務とし、その他に用務員や司書の監督にもあたった⁷⁰⁾。元々は大学の最高責任者である学監の下で学生の取締りにあたっていたが、学監と権限を競って衝突するようになった、という。学頭はいわば大学の或る面での代表者であり、通常、貴族の子弟が選ばれた⁷¹⁾。『七部法典』では常に単数で現われているが、(2)では複数となっており、複数置かれたと考えられる⁷²⁾。

さて、本題に戻ろう。名宛人の場合文書の冒頭に記されており、全く問題なく確定出来るが、請願者の方は多少厄介である。(1)～(3)と(6)については、文書の文言から請願者を確定出来る。例えば、(1)の場合なら、「汝の懇願に心を向けて」という部分から、名宛人の国王が同時に請願者であることが判る。(7)の場合は、これら程に明確ではないが、「汝の王国が学問を愛好していると称賛されることが汝にとって重要である」というように請願理由を繰返したと推定される部分からみて、矢張、名宛人の国王が請願者であると判断出来るし、また抑々国王に宛てられた文書の実質的文書発給請願者が国王以外であるとは考えにくい。(4)(5)については、以上のようにはいかず、不明とする他はない。請願者から乞われて本人に文書を発給するのが当然で、かかる留保は面妖に思われるかも知れないが、(6)のように両者が完全には一致しない場合があるのである。(6)では名宛人は“*Alexander episcopus servus servorum Dei dilectis filiis universitati magistrorum et scholarum Salamantin. salutem et apostolicam benedictionem*”，請願者は，“*Nos igitur, carissimi in Christo filii nostri……regis Castellae ac Legionis illustris ac vestris supplicationibus inclinati*”と夫々引用部分から特定出来、後者の *vestris* は名宛人を指すことは明らかであるから、名宛人以外に国王が請願者となっていることが判る。(6)と(2)～(5)を比べてみて、(6)のみにとくに王権が関与すべき理由は見当らない。だとすれば、請願者が特定出来ない(4)(5)、そしてそれが明示されている(2)(3)についても、国王が請願者に名を列ねているか、或いは仲介など何らかの形で関与していたと推測することが許されるのではあるまいか。

ところで我々は、(1)～(7)が1255年に発給されていることに注目したい。アルフォンソ10世が重要な証書を与えたのが1254年、そして翌年の1255年に7点の大勅書が集中的に出されているのである。この事実からみて、アルフォンソ10世は、自らの権限の範囲内で最大限の保護・充実を大学に与え、然るのちに今度は教皇の権力を利用して一層の保護・充実を企てたのではなからうか。こう考えると、教皇による大学への保護・特権の譲与に関しても、王権のイニシアチヴが強く働いていた、と言えるのである。

V アルフォンソ10世の大学理念

これまでの検討から、設立後のサラマンカ大学に王権とりわけアルフォンソ10世が深く関与していたことが明らかになったが、それでは国王は如何なる大学理念を抱いていたのであろうか。国王が編纂させた『七部法典』を素材としてこれを検討してみよう。同法典は1263年に完成したが、14世紀中頃に至るまでは法としての効力をもたなかったとされる。しかし国王の理念を探る上では有効な素材であると言ってよい。

『七部法典』第2部第31章は〈知識が学ばれるストゥディウムと教師・学生について〉と題され、序文と全11条から成っており、これが大学についての法令集となっている⁷³⁾。まず個々の箇条の主な内容を見ておこう。

第1条〈大学の定義・種類・設立者〉 大学は教師と学生の連合 (ayuntamiento) である。その種類には、ストゥディウム・ゲネラーレとストゥディウム・パルティクラーレ (e. particular) があり、前者は自由学芸 (artes) の教師 (文法, 論理学, 修辞学, 算術, 幾何, 天文学) と更に教令集教師と señores de leyes (法の主人=市民法教師) のいる大学で、教皇か皇帝か国王の命令によって創立さるべきであり、後者は一人の教師が或る町で開くもので、学生は少数で、高位聖職者か市町参事会が開設を命じ得る。

第2条〈大学の設立地と教師・学生の安全〉 大学は、教師と学生が健康に生活出来、勉学の疲れを癒せるような良い大気と美しい郊外をもち、パンとブドウ酒が豊富で、生活費の安い町に設立さるべきである。大学の設立地の市民は教師と学生を守護し、敬意を表すべきである。彼らの許に到来する使者は、彼らの父親やその他の故郷の人々の負債の故に逮捕されたり、所持品を没収されたりさるべきではない。学生やその父親への敵意や悪意の故に学生に不正・暴行を加えてはならない。教師・学生や彼らの使者と彼らの所持物は、何れの時も安全で保護さるべきこと。

第3条〈教師の数と給与〉 ストゥディウム・ゲネラーレと称し得るには学科の数だけ少なくとも1人ずつは教師がいなくてはならない。これが不可能なら、文法, 論理学, 修辞学, 市民法, 教令集に少なくとも1人ずつはいなくてはならない。給与は国王が決め、年3回 (開講時, 復活祭, 洗者のヨハネの祝日) に分けて与える。

第4条〈教育方法〉 教師が学生に自らの知識を教える方法は、本を講読することによるべきである。講読を始めたなら、完了するまで研究を続けるべきである。教師は健康ならば代講を命じてはならない。開講後、重大で長期に亘る病を得て、講読不可能となった場合も、給与はそのまま支給すること。死亡の場合は、相続人が給与を受領すること。

第5条〈校舎の位置と学生の住宅〉 個々の校舎は町から離れた同じ場所に互いに近接して設けらるべきである。学生が二つの講義をとり得るし、疑問点を互いに質問出来るから。しかし他の講義が聞こえてきて妨げとならぬ程度には離れているべきである。学生が現在住んでおり、将来も住む意志のある家屋 (posadas) や住宅を他の学生が賃借してはならない。既にある学生が住んでい

るが、賃借期限以後は留まる意志がないと知った場合には、留まる意志の有無を当人に確認した上で賃借出来る。

第6条〈教師・学生の団体結成権と学頭〉 多くの人々の連合や組合 (cofradías) は益よりも害をもたらすので、形成さるべきでないが、教師・学生についてはこれをストゥディウム・ゲネラーレの形で形成することを許す。彼らはラテン語で rector と呼ぶ学頭 (mayoral) を設けることが出来る。学頭は学生を処分し、学生が私党を組み互いに、或いは市民との間で争うことのないよう抑えるべきである。学生は何人に対しても暴力・不正を働かず、夜間出歩かず、住居で静かに勉学に励み、正直で良き生活を送ること。大学はこのために設立されたのであり、夜間出歩いたり、白昼武装して争ったり、その他の狂気の沙汰や悪行を働くことに血道をあげ、自らも傷つき、住む土地の妨げとなるために設立されたのではないのである。

第7条〈学生裁判〉 教師は、流血裁判 (plejto de sangre) でないならば、学生同志の間の訴願 (demanda) 及び一般市民の学生を相手とする訴願を裁くことが出来る。もし学生が一般市民を相手に訴願するときは、その相手に対する裁判権者に行なうこと。

第8条〈市民法の教師の待遇〉 市民法の学問は正義の源泉であり、世界は他の学問以上にそれを利用している。それ故、皇帝は、彼らに次のような特権を授けている。第1に教師となると、騎士 (caballeros) の称号をもち、〈法の主人〉と呼ばれる。第2に法の教師 (m. de derechos) が裁判官の面前に現われた場合は、彼らは起立して教師に挨拶をして迎えねばならない。第3に皇帝・国王・諸侯の館の門衛は、重大な秘密のある場合を除いて、教師に対してその門を閉ざして通行を妨げてはならない。第4に市民法の講座を20年間保持した教師は伯の榮譽を得る。余も市民法の教師がこれらの特典を享受することを嘉し、また彼らは人頭税 (pecho) を免除され、従軍義務を負わぬものとする。

第9条〈教師資格取得〉 教師たらんとする生徒 (discipulo) はまず学生とならねばならない。彼は充分学んだ後に学頭の面前に出頭し、当該学科の文献に関して講義を行ない、学生が原書 (testo) や註解書 (glosa) を十分に理解し、良き作法と流暢な言葉をもち、質問に良く答えられたならば、学頭は学生に教師となる榮譽を公式に与えるべし。

第10条〈用務員 (mensajero)〉 学生の組合はラテン語で bidellus と呼ぶ用務員をもつべきである。彼は学頭の命令で祝祭日を触れ回り、学生間での書物の売買の仲介を行ない、学生に集合するよう触れ回る。

第11条〈司書〉 司書は、文庫 (estaciones) に良き書物、読み得る書物、真正な原本・註釈書を保持し、それを学生に賃貸し、学生はそれを基に新しい書物を作ったり、既に作った写本を訂正したりする。何人もかかる文庫を学頭の許可を得ずに設けてはならない。

以上、全11条の主な内容を見てきたが、それらは多岐に亘っており、「一種の教育法典」⁷⁴⁾とか、「スペインの大学法」⁷⁵⁾とか評されるのも肯ける。次に必要な範囲に限って簡単に註釈を加えておく。

第1条は大学を構成する教師として自由学芸(6科)と教令集と市民法の教師を挙げている。所謂〈自由七科〉のうち音楽が欠けていることになり、前出の国王証書(5)⑥では音楽の教師が挙げられているのと矛盾するという印象を受けるが、音楽重視はサラマンカ大学のみの特徴だから、と考えておくしかない。この6科は基礎的学問であり含まれていて当然だが、これに神学ではなく法学が加わっていることが注目される。アルフォンソ10世の法学重視の姿勢の現われと考えられるからである。

第2条の内、立地については既に触れた。後半は国王証書(1)⑥と同内容であるが、父親などの債務に関わる規定まで含んでいてより詳しい。

第3条は第1条と比べると、最低限度必要な大学の構成として、〈自由七科〉の内の〈三科〉(trivium)と法学が挙げられており、ここでも法学が重視されていることが判る。

第4条の給与規定は、教師の処遇に配慮した措置であると言えよう。

第5条の後半は、国王証書(5)③と同内容。

第6条の前半は、一般的な団体結成禁止規定を教師・学生には免除した特権付与条項であり、教師と学生の連合としての大学の存立根拠を保証している。後半の学頭については既に触れた。

第7条は学生が当事者となった裁判の裁判権の規定で、①原告=学生、被告=学生、②原告=一般市民、被告=学生、③原告=学生、被告=一般市民の三つの場合のうちで、①②は教師や司教が裁判官となり(省略した部分には、②の場合に学生が教師か司教の面前でなければ裁判に応じないと申立てる必要があるという箇所があり、司教も含まれると考えられる)、③は特別法裁判官(町の裁判官)が裁くとしている。全体として裁判に関する学生保護規定であると言えよう。ところで国王証書(5)④では学生の裁判を司教と学監が行なうとされているが、これは流血裁判の場合であると思われ、第7条はこれを除く債務などの民事裁判についての規定であり、とくに矛盾しないと考えられる。只、この全11条に学監という言葉が全く現われないのは気になるところではある。

第8条は皇帝が市民法学教師に与えた四つの特典(称号、裁判官からの表敬受権、君主拝謁権、伯の榮譽取得権)をアルフォンソ10世も認め、更に免税・従軍義務免除の特権をも付与したものである。この中で伯位に関する規定が理解困難であるが、これは実際に伯位に即くというよりは伯と同等の処遇を受けるという意味と解すべきではなかろうか。

第9条は教授資格の付与権者を学頭と規定しているが、これは形式的なもので、実質的審査は教師が行なったものと推測される。さもないと省略した部分にある、学頭は学生から資格授与にまつわる贈与を行なっていない旨の誓約を得るという規定が理解出来なくなる。

第10条は広報役とも言ってよいもので、その職掌柄、自然と情報が集まり、書物の売買を仲介したものだと思われる。

第11条の司書は、国王証書(5)⑥で給与が支給されているため大学の職員と考えてこう訳したが、内容を見ると書物を所有し、学頭の許可を得て文庫を設け、学生に賃貸する業者のようにも取れ、その性格は判然としない。公的・私的の何れにせよ、文庫は、写字室、閲覧室の機能をもち、今日

の大学図書館の前身にあたると言えよう。

以上の全11条に関して、特に留意すべきは、王権によるものであるから当然ではあるが、国王証書に関して述べたことと全く同じことがここでも確認出来ることである。即ち、第1に、第2・4・5・6・7条に現われた大学構成員に対する保護や特権付与の政策、第2に、第1・3条から看取される法学重視、とりわけ第8条の市民法学の教師の地位の高さや特権に象徴される市民法学重視の姿勢である。つまりアルフォンソ10世にとって大学はまさに市民法学の研究・教育の拠点として意識されていたのである。

それではかくまで重視された市民法学はアルフォンソ10世にとって如何なる意味をもっていたのか。最後にこの問題に答えることを通して、本稿の課題を果たすことにしたい。

お わ り に

アルフォンソ10世は賢王 (El Sabio) と呼ばれるように学問に造詣が深く、多くの著述に関与し、学芸の高揚に寄与したが、法とも深い関係を有していたことは良く知られている。父王に代わって裁判を主宰するのを好んだという逸話⁷⁶⁾が示唆するように、法への関心が深く、甥の Juan Manuel の言によれば、「すべての教会法や世俗法をスペイン語に翻訳した」⁷⁷⁾とされ、法典や註解書の摂取に努めたことが分るが、より重要なのは自国の法典編纂事業を推進したことである。アルフォンソ10世が発起して法学者に編纂させた『国王フエロ』 (*Fuero Real*)、『法鏡』 (*Espéculo*)、それに『七部法典』などの法書は、スペイン法制史上に燦然と光彩を放っている⁷⁸⁾。これらの法書は、カスティーリャ王国におけるローマ法を中心とする普通法 (*ius commune, derecho común*) の継受 (*recepción*) と密接に結びついていた。ローマ法は教会に浸透し、カノン法学者の関心の対象とはなっていたが、王国の行政・法の分野への浸透はアルフォンソ10世時代になって初めて実現し、その産物が上記の諸法書なのである⁷⁹⁾。

ローマ法継受の理由は、旧来の法体系では対応出来ない都市経済・商取引の発展などの新たな時代状況もあるが、王権との関係でいえば、抑々絶対的ローマ皇帝権を背景にもつローマ法が王権強化にとって好都合な法体系であったからである⁸⁰⁾。『ローマ法大全』 (*Corpus Juris Civilis*) の一部を成す『学説彙纂』 (*Digesta*) に収められた「君主が良しとすることが法の効力を有する」 (*quod principi placuit legis habeat vigorem*)、「君主は法から解放されている」 (*Princeps legibus solutus est*) というような有名な定式は、王国内で自己の権力の強化＝絶対化を図る王権にとっては格好の理論的基盤を与えるものであり、同時にローマ法導入は地方的フエロに分裂していた王国の法状態を克服し、集権的支配に適合的な統一的法体系の樹立にも役立つものであった⁸¹⁾。

ローマ法の継受には三つのルートがあった⁸²⁾。第1は学生。12世紀後半以来、ローマ法復活の舞台となったボローニャ大学などに学生が赴き、ローマ法を修得し、中にはそのままボローニャ大学で教鞭をとる者もいたが、大部分は帰国して行政・裁判・軍隊・教師の要職に就き、夫々の立場か

らローマ法の普及に寄与した。第2は法書。12世紀末に既にローマ法やカノン法の法典がスペインに導入されていたが、13世紀に入ると、原典や註釈学派・註解学派の著作が大量に流入するに至り、これがローマ法の導入・普及に貢献した。そして第3が13世紀前半から設立され始めた大学なのであり、そこでのローマ法の研究・教育がその継受・普及に大きな力となったことは疑念の余地がない。このようにサラマンカ大学の設立はローマ法継受という大きな潮流の中に位置づけられるのである。

ところで前出の『七部法典』第2部第31章の序文には「国王と人民は彼らが住まう土地を如何にして敵から保護しながら、愛し、守らねばならぬかについては、これ以前の諸章において完全に述べた。人民・土地・王国は賢人を利用し、その助言によって守られ、導かれるので最後にこの〔第2〕部の終わりに大学と知識を教え、学ぶことに努めている教師や学生とについて語りたい」とあり、ここからは王国の経営に賢人の助言が必要であるが、それを供給するのが大学に他ならないという観点を看取することが出来る。既述のように大学の学問の中核がローマ法であったことを考えれば、かかる賢人とはローマ法学の素養をもった学者や法曹であると見做すことが出来よう。このように大学は王国の政治と密接な繋がりをもった存在として位置づけられており、それがまた王国・人民・戦争といった王国の政治を対象とした『七部法典』第2部の中に大学の法令が含まれているという一見奇異な事実を理解する鍵にもなるのである。

以上から、サラマンカ大学は王権強化のためにローマ法の導入を図るアルフォンソ10世にとって、そのためのひとつの重要な手段であったことが判る。このためにアルフォンソは祖父の設立したサラマンカ大学をローマ法の導入・普及の拠点として再編・強化し⁸³⁾、手厚い保護・特権を与えたのである。勿論、サラマンカ大学には王権強化とは関係のない音楽の講座なども置かれており、大学の保護・充実がアルフォンソ10世の文化政策の一環としての性格をもったことは否定出来ない。しかしそれは飽く迄一面にすぎず、その本質においてはサラマンカ大学は王権の権力強化志向を支える支柱としての基本的性格を有していたのである。

〔略語表〕

AHDE	<i>Anuario de Historia del Derecho Español</i>
DPA	I. Rodríguez de Lama, <i>La documentación pontificia de Alejandro IV (1254-1261)</i> , Roma, 1976
BUS	V. Beltrán de Heredia, <i>Bulario de la Universidad de Salamanca (1219-1549)</i> , tomo I, Salamanca, 1966
CUS	V. Beltrán de Heredia, <i>Cartulario de la Universidad de Salamanca (1218-1600)</i> , tomo I, Salamanca, 1970
DACDS	J.L. Martín Martín / L.M. Villar García / F. Marcos Rodríguez / M. Sánchez Rodríguez, <i>Documentos de los Archivos Catedralicio y Diocesano de Salamanca (Siglos XII-XIII)</i> , Salamanca, 1977
HUH	C.M. Ajo G. y Sáinz de Zúñiga, <i>Historia de las universidades hispánicas. Orígenes y desarrollo desde su aparición a nuestros días</i> , tomo I, Madrid, 1957

- HUS E. Esperabé Arteaga, *Historia pragmática e interna de la Universidad de Salamanca*, tomo I, Salamanca, 1914
- OUS V. Beltrán de Heredia, *Los orígenes de la Universidad de Salamanca*, Salamanca, 1953 rep. 1983
- UGU H. Denifle, "Urkunden zur Geschichte der mittelalterlichen Universitäten. V. Die päpstlichen Documente für die Universität Salamanca", *Archiv für Literatur und Kirchengeschichte des Mittelalters*, 5, 1889

- 1) 中世スペインの文書において大学は, scholas, escuelas, academia, estudio, studium, studium solemne, studium generale, universitas といった様々な呼称で現われる。A. Barcala Muñoz, "Las universidades españolas durante la Edad Media", *Anuario de estudios medievales*, 15, 1985, p. 87. 本稿では適宜訳し分けたが, 内実は同一のものであると考えてよい。
- 2) サラマンカ大学史関係の文献目録として本稿で利用したのは, H. Rashdall, *The universities of Europe in the Middle Ages*, Ed. by F. M. Powicke and A. B. Emden, Vol. II, Oxford. 1936, 1987. pp. 74f. (ラシュドール・横尾壮英訳『大学の起源(中)』東洋館出版社, 昭和42年, 76-77頁); R. Gibert, "Bibliografía sobre universidades hispánicas" en *Bibliographie internationale de l'histoire des universités*, I, Gèneve, 1973, pp. 42-53; A. García y García, "Bibliografía de historia de las universidades españolas", *Repertorio de historia de las ciencias eclesiásticas en España*, 7, 1979, pp. 617-622; L. E. Rodríguez-San Pedro Bezares, *La Universidad Salmantina del Barroco, período 1598-1625*, t. I, Salamanca, 1986, pp. 59-182; A. M.^a Carabias Torres, *Colegios mayores: centros de poder*, t. III, Salamanca, 1986, pp. 1201-1252.
- 3) R. Gibert, *Historia general del derecho español*, Madrid, 1977, p. 55.
- 4) J. Lalinde Abadía, *Iniciación histórica al derecho español*, Barcelona, 1978², p. 117.
- 5) A. García-Gallo, *Manual de historia del derecho español*, t. I, Madrid, 1973⁵, p. 313.
- 6) A. Jiménez, *Historia de la universidad española*, Madrid, 1971, pp. 44, 57f.
- 7) J. González, *Alfonso IX*, 2 tomos, Madrid, 1944, I, p. 458.
- 8) OUS, p. 17. (本論文は, *La Ciencia Tomista*, 81, 1954にも掲載され, 更に *Miscelánea Beltrán de Heredia*, t. I, Salamanca, 1972にも収録されている)
- 9) J. Fernández Conde, "Estudios generales o universidades españolas" en *Historia de la Iglesia en España*, II-2, Madrid, 1982, p. 187.
- 10) J. M. Pérez-Prendes, *Curso de historia del derecho español*, vol. I, Madrid, 1983, p. 624.
- 11) L. de Echeverría, *Presentación de la Universidad de Salamanca*, Salamanca, 1985, p. 20.
- 12) A. Rodríguez Cruz, "La Universidad de Salamanca en la alba de su historia" en *Estudios sobre los orígenes de las universidades españolas*, Valladolid, 1988, p. 34.
- 13) Rashdall, *op. cit.*, p. 75. (邦訳, 78頁) ラシュドールは1230年の少し前と述べているが改訂者は1227年と明記している。
- 14) 序文は, HUH, p. 196 n. 187; Echeverría, *op. cit.*, p. 24 (碑文の写真版); Rodríguez Cruz, *art. cit.*, p. 35 n. 13.
ANNO DOMINI M. CC. / ALFONSUS OCTAVUS CASTELLAE REX PALLAN / TIAE UNIVERSITATEM EREXIT; CUJUS AEMULATIONE AL / FONSUS NONUS LEGIONIS REX SALMANTICAE ITIDEM ACA / DEMIAM CONSTITUIT.
- 15) HUS, p. 19. (Esperabéのこの史料集は, 史料を活字化したのみで, 日付の掲出, 内容要約もなく使いにくいので, 次の目録を併用すると便利である。J. Beltrán Llera et al., "Regesta de los documentos reales de la Universidad de Salamanca (1243-1832)", *Salmanticensis*, 7, 1960); HUH, doc. IV.
- 16) 原文は, CUS, doc. 11.
"Aldefonsus rex Legionis, ubi cum filio suo pacem habuit, quosdam rebelles in regno suo perdomuit,

rege Fernando filio suo auxilium praebente. Et congregato exercitu magno, contra sarracenos arma movit et cuncta quae erant in circuitu de Caceres, scilicet arbores, vineas et segetes ferro et flamma vastavit, et ad propria reversus est.

Hic salutari consilio evocavit magistros peritissimos in sacris scripturis et constituit scholas fieri Salamanticae

Et quia rex Portugalensis regem Legionensem offendit, rex Aldefonsus obsedit castrum ipsius quod dicitur Sanctus Stephanus de Cavia et accepit illud. Sed facta pace cum rege Portugaliae

- 17) 原文は, CUS, doc. 42.

"Rex autem Aldefonsus et regina Berengaria, susceptis filiis supradictis propter consanguinitatem fuerunt ab Innocentio papa tertio separati. Et postea inter reges guerra et vastationes vix aliquo tempore cessarunt. Et cum infestaretur ab omnibus regibus convicinis, semper Dominus adjuvit eum. Et ut amplius adjuvaret, *apud Salamaniticam generale studium de re ditibus propriis ordinavit*. Cumque ipsum rex Portugaliae offendisset, obsedit rex Aldephonsus Castrum ipsius quod Sanctus Stephanus de Chaviae nuncupatur, et obtinuit in virtute."

- 18) Rashdall, *op. cit.*, p. 75 n. 1.

- 19) 各年代の特定は, Rodríguez Cruz, *art. cit.*, p. 34に拠る。

- 20) 前註18)。

- 21) OUS, p. 16.

- 22) *Primera crónica general de España*, ed por R. Menéndez Pidal, II, Madrid, 1977, cap. 993(p. 673).

- 23) 後出11頁。

- 24) 後出14頁。

- 25) 後出6～7頁。

- 26) OUS, pp. 12f.

- 27) J. García Oro, "Compostela, academia de Galicia medieval", en *Estudios sobre los orígenes de las universidades españolas*, Valladolid, 1988, p. 70.

- 28) Beltrán de Heredia, "La formación intelectual del clero en España durante los siglos XII, XIII y XIV", en *Miscelánea Beltrán de Heredia*, t. I, pp. 22-27. (初出は, *Revista Española de Teología*, 7, 1946); A. García y García, *El Studium Baroniense y la península ibérica*, en Id., *Iglesia, sociedad y derecho*, t. I, Salamanca, 1985, pp. 47f.

- 29) 以下, 国王尚書局に関して, 全般的には, A. Millares Carlo, "La cancellería real en León y Castilla hasta fines del reinado de Fernando III", *AHDE*, 3, 1940, pp. 253-269; OUS, pp. 14f. とくにアルフォンソ9世期については, J. González, *op. cit.*, pp. 479-492.

- 30) 原文は, Millares Carlo, *art. cit.*, pp. 261-263.

- 31) 以下の議論の基本的構想は, J. González, *op. cit.*, pp. 459-460; Id., "Repoblación de la 'Extremadura' leonesa", *Hispania*, 3, 1943, pp. 267-268に負っている。

- 32) *Poema de Mio Cid*, ed. de R. Menéndez Pidal, Madrid, 1980¹⁹, verso 1290 (p. 178) (Clásicos Castellanos 24).

- 33) OUS, p. 15; CUS, pp. 48f.

- 34) J. L. Martín Martín, *El cabildo de la catedral de Salamanca (siglos XII-XIII)*, Salamanca, 1975, pp. 60-62.

- 35) DACDS, núm. 86. (この史料集の目録として, F. Marcos Rodríguez, "Documentos del archivo catedralicio de Salamanca", *Salmanticensis*, 7, 1960, pp. 467-496, 703-763がある)

- 36) DACDS, núm. 16.

- 37) DACDS, núm. 61.

- 38) DACDS, núm. 67.

- 39) DACDS, núm. 75.

- 40) *DACDS*, núm. 101.
- 41) *DACDS*, núm. 106.
- 42) González, *op. cit.*, pp. 453f.
- 43) *DACDS*, núm. 27.
- 44) González, *op. cit.*, p. 459.
- 45) *DACDS*, núm. 120.
- 46) *HUS*, p. 19; *HUH*, doc. IV.
- 47) *HUS*, p. 20; *HUH*, doc. VI.
- 48) *HUS*, p. 20; *HUH*, doc. VII.
- 49) *HUS*, p. 21; *HUH*, doc. VIII.
- 50) *HUS*, pp. 21-23; *HUH*, doc. IX.
- 51) *HUS* と *HUH* では200mrs.となっているが、これだと総計が2,600mrs.となってしまうし、教師の給与に比して余りに大きすぎるとも思われる（但し司書が純然たる職員で、この中に書物代まで含まれているかどうかで判断は多少異なろう）ので、Beltránの引用の方をとり、100mrs.としておく。
OUS, p. 30.
- 52) *HUS*, pp. 23-24; *HUH*, doc. XVI.
- 53) *HUS*, p. 24; *HUH*, doc. XIX.
- 54) *HUS*, p. 25; *HUH*, doc. XXI.
- 55) M. González García, *Salamanca en la Baja Edad Media*, Salamanca, 1982, p. 129.
- 56) *OUS*, p. 22.
- 57) *OUS*, p. 25.
- 58) Beltrán de Heredia, "La cancellería de la Universidad de Salamanca", *Salmanticensis*, 1, 1954, p. 8.
- 59) *Ibid.*, pp. 3-8.
- 60) Rashdall, *op. cit.*, p. 81. (邦訳, 82頁)
- 61) J. J. Rey, "Alfonso X y la música en su época", en *Alfonso X*, Toledo, 1984, pp. 110, 108. なお、アルフォンソ10世と音楽を繞っては、1984年にシンポジウムが開催され、その報告が公刊されている。
Symposium Alfonso X el Sabio y la música, Madrid, 1987.
- 62) *UGU*, Nr. 1; *BUS*, doc. 10; *DPA*, núm. 45.
"Salamantinam civitatem, ut fertur uberrimam, et locum in regno tuo Legionensi salubritate aeris et quibuslibet opportunitatibus praelectum, venerabilis fratris nostri...episcopi et dilectorum filiorum capituli Salamantini accedente consilio et assensu, generale studium statuisti et ut generale studium a doctoribus et docentibus in posterum frequentetur, humiliter postulasti a nobis apostolico id munimine roborari.
Nos igiturtuis supplicationibus inclinati, quod super hoc a te de assensu episcopi et capituli praedictorum factum est ratum habentes et gratum, id auctoritate apostolica confirmamus et praesentis scripti patrocinio communimus."
- 63) *UGU*, Nr. 3; *BUS*, doc. 11; *DPA*, núm. 80.
"Petitionibus vestris benignum impertientes assensum, ut commune sigillum habere ac eo uti libere valeatis, devotioni vestrae liberam concedimus auctoritate praesentium facultatem."
- 64) *UGU*, Nr. 2; *BUS*, doc. 12; *DPA*, núm. 79.
"Hinc est quod, vestris supplicationibus inclinati, auctoritate vobis praesentium indulgemus ut nullus delegatus vel subdelegatus, executor seu etiam conservator possit auctoritate sedis apostolicae vel legatorum ipsius in universitatem vestram excommunicationis, suspensionis vel interdicti sententias promulgare absque speciali mandato sedis ejusdem faciente de indulgentia hujusmodi mentionem."
- 65) *UGU*, Nr. 4; *BUS*, doc. 13; *DPA*, núm. 106.

"indulgemus ut nullus in universitatem magistrorum vel scholarium seu rectorum vel procuratorum aut quemquam alium pro facto vel occasione universitatis excommunicationis, suspensionis vel interdicti sententias velet promulgare absque sedis apostolicae licentia speciali"

- 66) *UGU*, Nr. 5 ; *BUS*, doc. 14 ; *DPA*, núm. 107.

"Sane cum saepe contingat, ut dicitur, quod in civitate Salamantina plures doctores et scholares, propter violentas manuum injectiones in clericos, excommunicati decedant,quorum nolumus nec expedit studium per absentiam impediri, auctoritate tibi praesentium indulgemus ut ipsis qui ad invicem in se vel alias personas ecclesiasticas manus injecerint violentas, nisi tam gravis aut enormis fuerit excessus ut merito sint ad sedem apostolicam destinandi, juxta formam ecclesiae, beneficium absolutionis impendas, mandans eis sub debito praestiti juramenti ut passis injuriam satisfaciant competenter et in similibus de cetero non excedant."

- 67) *UGU*, Nr. 6 ; *BUS*, doc. 15 ; *DPA*, núm. 112.

"ut postquam aliquis magistrorum vel scholarium in Salamantino studio in quacumque facultate, examine legitimo praecedente, inventus fuerit idoneus ad regendum, in quolibet generali studio, Parisiensi et Bononiensi dumtaxat exceptis, in facultate ipsa pro qua ibi semel examen subiit, sine iterato examine ac alicujus contradictione regere valeat, vobis et vestris successoribus auctoritate praesentium indulgemus." 文書の日付が, *UGU* と *DPA* では, 10月1日となっている。文書は, サラマンカ大学文書館とヴァティカン文書館に所蔵されており, 両者の日付がそもそも異なっているのか, 何れかの書き落としか添加によるものか (原文では, decimo kal. Octbris の decimo の有無の違いにすぎない), 我々には判らない。ここでは, *BUS* に従っておく。

- 68) *UGU*, Nr. 7 ; *BUS*, doc. 16 ; *DPA*, núm. 120.

"in regno tuo apud Salamanticam civitatem, consideratis circumstantiis universis, de consilio praelatorum ejusdem regni, generale, de quo te commendamus plurimum, statuisti studium, et magistris in singulis facultatibus regentibus de annuo certo salario providisti. Ut igitur idem studium optata recipiat incrementa, omnibus ibidem studere volentibus, regularibus dumtaxat exceptis, praesentium auctoritate concedimus, ut in eadem civitate jura civilia per triennium proximo venturum audire valeant, constitutionibus contrariis non obstantibus." *UGU* では日付が 10月20日となっているが, 誤記であろう。

- 69) Echeverría, *op. cit.*, pp. 21-22.

- 70) 後出15頁。

- 71) A. M. Rodríguez Cruz, *El oficio de rector en la Universidad de Salamanca y en los universidades hispanoamericanas*, Salamanca, 1979, p. 38.

- 72) Beltrán de Heredia, "Constitución y régimen académico en Salamanca durante los siglos XIII y XIV", *Anuario de la Asociación Francisco de Vitoria*, 22, 1957, p. 201.

- 73) *Las Siete Partidas*. Glosadas por el licenciado Gregorio Lopez, Madrid, 1555, ed. facsi., 3 tomos, Madrid, 1974, t. I, part II, tít. XXXI, leyes I-XI.

- 74) Rashdall, *op. cit.*, p. 78. (邦訳, 80頁)

- 75) Jiménez, *op. cit.*, p. 103.

- 76) A. Ballesteros Beretta, *Alfonso X el Sabio*, Madrid, 1963 rep. Barcelona, 1984, p. 59.

- 77) Don Juan Manuel, *Libro de la caza*, en *Obras completas*, I, Madrid, 1982, p. 520.

- 78) アルフォンソ10世の法典編纂事業は, 別稿を必要とする重要なテーマであり, ここでは主要な研究を列挙しておくに留める。A. García-Gallo, "El 《Libro de las leyes》 de Alfonso el Sabio. Del Espéculo a las Partidas", *AHDE*, 21-22, 1951-52 ; Id., "Nuevas observaciones sobre la obra legislativa de Alfonso X", *AHDE*, 46, 1976 ; Id., "La obra legislativa de Alfonso X", *AHDE*, 54, 1984 ; A. Iglesia Ferreirós, "Alfonso X el Sabio y su obra legislativa : Algunos reflexiones", *AHDE*, 50, 1980 ; Id., "Fuero Real y Espéculo", *AHDE*, 52, 1982 ; Id., "Alfonso X, su labor legislativa y los historiadores", *Historia. Instituciones. Documentos*, 9, 1982 ; J. R. Craddock, "La cronología de

- las obras legislativas de Alfonso X el Sabio", *AHDE*, 51, 1981; J. M. Pérez-Prendes y Muñoz de Arraco, "La obra jurídica de Alfonso X el Sabio", en *Alfonso X*, Toledo, 1984.
- 79) G. Martínez Díez, "Los comienzos de la recepción del derecho romano en España y Fuero Real", en *Diritto comune e diritti locali nella storia dell' Europa. Atti del Convegno di Varenna*, Milano, 1980, p. 258.
- 80) F. Tomás y Valiente, *Manual de Historia del derecho español*, Madrid, 1979, pp. 195-198; E. Gacto Fernández / J. A. Alejandro García / J. M. García Marín, *El derecho histórico de los pueblos de España*, Madrid, 1982, pp. 264f; J. Valdeón Baroque, *Alfonso X el Sabio*, n. p., 1986, p. 31.
- 81) J. Valdeón Baroque, "Alfonso el Sabio, el rey y el hombre", en *VII centenario del Infante D. Fernando de La Cerda. 1275-1975*, Ciudad Real, 1976, p. 302; M. A. Ladero Quesada, "Los estados peninsulares a la muerte de Alfonso X el Sabio", en *ibid.*, p. 320.
- 82) 以下は, Gacto Fernández et. al., *op. cit.*, pp. 266-271に拠っているが, 他の著作について見ると, Lalinde Abadía は, まずスペイン諸国家には〈継受〉という一般的現象はなく, 夫々の国において異なった〈浸透〉(penetración)があったのみとし, カスティーリャにおいても強い浸透はあったが継受はなかったとし, 浸透のルートを, 文献によるルート(法書)と学問によるルート(学生)とに分けている。Lalinde Abadía, *op. cit.*, pp. 116f. Escudero は, スペインからの留学生の赴いたボローニャ, 南仏のモンペリエ, トゥールーズからスペインの諸大学までを含めて, 大学の役割を重く見ている。J. A. Escudero, *Curso de historia del derecho*, Madrid, 1987, pp. 430f. Iglesia Ferreirós は, 導入ルートを口頭によるルート(ボローニャへのスペイン留学生)と文字によるルート(法書)とに分けている。A. Iglesia Ferreirós, *La creación del derecho. Una historia del derecho español*, Fascículo 2, Barcelona, 1988, pp. 230-234. なお法書に関しては, ローマ法大全, カノン法大全の原典, 外国人やスペイン人の手に成る註解書など, スペインの文書館に存在するローマ法継受に関する文献の悉皆調査として, A. Pérez Martín, "El estudio de la recepción del derecho común en España" en *I Seminario de Historia del derecho y derecho Privado*, Bellaterra, 1985は圧巻。最後に García y García は, ローマ法浸透の水路として, スペインにおけるカノン法(*Caesaraugustana* など)や世俗法(*Usatjes* など)の集成, 公証人の実務, 学生(法書の運び手でもある)の留学, スペインの諸学校における外国人学者の存在を挙げている。A. García y García, "En torno al derecho romano en la España medieval" en *Id., Iglesia, sociedad y Derecho*, I, Salamanca, 1985, pp. 66-69. 外国人学者のリストは, *Id.*, "El Studium Baroniense", pp. 54-57にあるが, ボローニャ大学教授の著名な法学者アックルシウス(F. Accursius)の2人の息子がサラマンカ大学で教鞭をとっていたらしいという事実(Pérez Martín が指摘しているという)とアルフォンソ10世側近の法学者 Jacobo Ruiz (J. de las Leyes) 正しくは Giacopo Giunta o Giunti が, ボローニャで学んだイタリア人であったという事実は注目に値する。
- 83) 前出2頁の史料3から神学者が招聘されていること, 史料4から大学設立の目的が神の加護を願うためであったことからみて, 設立当初は神学中心であったものと想像される。アルフォンソ10世は明確なポリシーの下に法学中心の大学としてサラマンカ大学を再編したのではないのか, というのが我々の仮説である。